

## 山砲第九連隊満州の訓練も命がけ

石川 泉 清水 俊彦

—清水さんは、何年の徴集ですか。師団は金沢の第九師団ですか。

私は大正九年六月二十一生まれだから、昭和十五年兵です。右手の人差指が悪く第二乙種でした。現役なら十五年十二月入営なのですが、翌年二月に召集になりました。

第九師団の山砲ですが、山砲九連隊は独立山砲と合併したものです。当時満州牡丹江に駐屯していました例の対ソ戦争予定の、関東軍特別演習という名前で大動員したのが十六年七月ですから、五か月前に丸腰のまま、金沢に集合して船で朝鮮經由、直接牡丹江の連隊へ入営したわけです。

関特演前後ですから、対ソ戦準備のため林のなかで訓練に明け暮れ、実戦には出ないのだが、随分苦勞したも

のです。入営したときの体重は六十キロ以上だったが、関特演のあとでは五十七キロと三キロ余減ってしまつた。肉体的にも精神的にも、関東軍の演習、老黒山付近での訓練教育がきびしかったからですよ。

—何年ぐらい満州にいたのですか。訓練、とくに山砲はひどいようですが、お話下さい。

昭和十六年二月から十九年六月まで満州にいた。訓練のほか国境警備もしましたが、山砲の訓練について話をしましょう。

山砲の演習はキツイ。私は体が小さい方なので駄載訓練がひどかった。砲身を馬のうえにのせるとき、のらないので胸のうえにのせてからのせる。だから肋骨を折つた者もいた。息ができなくなったこともある。

うちの連隊には独立山砲の者がいたが、「独山」は全国からの寄り合い。豪傑が多くて、万年「啖壺」といって万年一等兵がいて（成績や素行が悪くて、何年たっても進級出来ない古兵）、そのなかには意地が悪く、しまつておえない者もあり、初年兵の時が一番つらかった。その時は「孫子の代まで、山砲の兵隊にやりとらない」と

思った。訓練もきついが、寒さもこたえた。零下三十度ともなると、ジツとしていられなくなる。衛兵に出た時、歩哨に立たされるとまいった。じつとしていられない、あれには。

凍傷で耳や鼻をなくした者も多いが、一番多いのは足の小指の凍傷だ。馬部隊なのでおのおの馬に乗るからとくに寒い。足のさきがやられる。直接の戦闘はなかったが。

— 関東軍の訓練はとくにきびしいということですが、事故を起こしたものはいましたか。

寒さのほか、演習もきつかった。無敵関東軍の精神があるから。病気で内地へかえされた者もあったが、自殺者も二、三人いたし、逃亡も何人かおる。私らの知っているのでは、帰ってきたのが一人いる。頭が変になる(精神病)が、軍隊がきらいになったものだ。関特演の時に不眠不休で山のなかを歩かされ、その時、頭が変になった者が多い。

老黒山の夜営中、私等も死にそこなった。

河上が豪雨で増水して、一個中隊が取り残された。な

にしろ、雨が二、三日つづいて、堤防のない中州に馬部隊が宿営していた。うっかりしていると水没する。急流だから全員死んでしまう。

その時、決死隊が四、五人選ばれた。最後に残った者が綱を引っ張るが、綱をしはった中州の木が抜けてしまった。河へ飛び込んだ人のうち、四十七人が水死。最後の木にしがみついていた六人だけが助かった。

そのときの山砲は一個人隊だったが、なんとしても助けなければならぬ。私が決死隊のとき、水深は深いところで一メートル五十ぐらいだが流れが早く、三百メートルぐらい流されてしまった。馬をつなぐロープを泳ぎながら腰にしぼって、どうにか流されぬですんだ。流されれば、四十七人の水死者に私も加わることになるわけ。

砲は一個中隊分の三門しか持っていかなかったが、砲は中州に残し、流されずにすんだ。大隊長は左遷されてしまった。

— 満州の部隊は南方や内地に移動されていたが、第九師団はたしか、台湾軍(第十方面軍)に転属になっ

たはずですが。

昭和十九年六月頃か、沖繩移動の先発で現地へ着いた。沖繩で夏を過ごして、十月に台湾へ行った。

(注、金沢の第九師団(武)は満州から台湾軍に転属して、沖繩第三十二軍の隷下にはいった。しかし、台湾を重視して第九師団を沖繩南部から台湾へ移動させた。

そのため、沖繩は第二十四師団(山)と、第六十二師団(石)の二個師団が主力だった。四月一日、米軍は防御のうすい地域に、我が軍の抵抗を受けずに上陸し、六月まで日本軍主力を南部に圧迫、玉砕に追いこんだ。)

清水さんの部隊は台湾へいったので命拾いをしたわけ、運は紙一重ですね。

私も運は紙一重と思います。沖繩で玉砕しなくて命は助かったのです。

二十年三月に、戦没者の遺骨幸領者として、内地へ出張を命ぜられたのです。私はもう下士官に任官していたため部隊から一人選ばれたのです。無事内地に着きました。

た。当時はすでに制空権もなく、台湾近海には、沖繩上陸準備の米艦艇、とくに潜水艦が常時出沒していた。

ところが、沖繩には米軍が上陸している。本土への空襲がはげしく、本土防衛が大変だった。台湾へ帰るわけには行かなくなってしまった。

内地では、六月十日付で、「外地部隊の者で、内地に公用で来ている者は、内地部隊に編入する」という大本營の命令が出た。そこで私は久留米の砲兵隊へ転属させられました。

私は三月から六月まで、西部軍司令部にいたが、その間に福岡も空襲された。兵隊の死傷はあまりなかったが、民間の被害は相当あったようだ。

八月十五日終戦になり、私は内地で復員した。